

# \* 歌語「さゆりば」小考——催馬楽「高砂」と『源氏物語』にふれて——

植木朝子\*\*

「さゆりば（さ百合葉）」という歌語がある。文字通りに取れば、百合の葉のことを指すと考えるのが自然であり、たとえば『日本国語大辞典（第二版）』なども「百合の葉」と解するが、実際の用例においては、後に見るように、ほとんど「百合」と同義で使われている場合も多いように思われる。<sup>①</sup>本稿では、歌語「さゆりば」に検討を加え、この語の成立に、『源氏物語』における催馬楽「高砂」引用が影響を与えている可能性について論じてみたい。

## 一、「やゆりば」の和歌

和歌における百合については既に指摘があるように、『万葉集』に十一例ほどがみられた後、平安初期にはなぜか和歌に詠まれなくなる。三代集時代の用例は皆無に等しい状態である。『万葉集』の次に見られる百合の用例は、大江匡房まで下り、「さゆりば」という形で登場する。この匡房詠が「さゆりば」の語の和歌における初出でもあった。以下、管見に入った「さゆりば」の用例をおおよそ詠歌年次順に掲げる。

また、かげさへ、ましみづ、さゆりば

①とぶかりのかげさへ見ゆるまし水につゆふりかけよにしのさゆ

りば (江帥集・四九二)<sup>③</sup>

やまとなでしこをよめる

②けさも又いざみにゆかんさゆりばに枝さしかはすやまとなでしこ (散木奇歌集・三三五)

皇后宮権大夫師時の八条の家歌合に野風を

③しほみてばのじまがさきのさゆり葉に波こす風のふかぬ日ぞなき (同・三三八)

しのびたる女のもとにつかはしける

④をうなごがくさかりをかのさゆりばのしめゆふまでは人にしらすな (基俊集・八一)

海辺蛭

⑤はまかぜになびく野島のさゆり葉にこぼれぬ露は蛭なりけり (清輔集・八三三)

なつ

⑥なつかりのせこふみしだきわくる野にしほれやすらんさゆりばの花 (殷富門院大輔集・四二二)

野辺の杜の間、夏草しげき所

⑦夏ふかき野べのさゆりば風過ぎて秋おもほゆる杜の陰かな

(長秋詠草・六二九)

夏十首

⑧ ふるさとのにはのさゆりばたまちりてはたるとびかふなつのゆ  
ふぐれ (秋篠月清集・五二〇)

夏十五首

⑨ 夕だちの露より雲やかへるらむまた雨まねく庭のさゆりば

(拾玉集・二三二七)

夏草

⑩ さゆり葉にまじる夏草しげりあひてしらね世にぞくちぬとお  
もひし (拾遺愚草・一一一七)

夏十五首

⑪ さゆり葉のしらね恋もあるものを身よりあまりて行く蜚かな

(同・一三三〇)

夏七首

⑫ うちなびくしげみが下のさゆりばのしらねほどにかよふ秋風  
(同・一七四六)

北窓風力贈来客 南澗泉声是淡交

⑬ さゆり葉のしらねしたにさく花の草のしげみになどまじりけ  
ん (拾遺愚草員外・六三六〇)

夏

⑭ ずしやと風のたよりを尋ねればしげみになびく野べのさゆり  
ば (式子内親王集・二三二)

夏草蔵水

⑮ 風ふかでなびくにしるしさ百合葉のしたよりかよふ庭の遣水  
(寂蓮法師集・二二〇〇)

夏

⑯ さゆり葉のかづらき山のみねの月暁かけて影ぞすずしき  
(後鳥羽院御集・一二九五)

夏七首

沙弥生蓮

⑰ 夏野なるしげみがなかのさゆり葉の花をばよきてみまきにか  
れ (御室五十首・七七三)

夏

沙弥寂蓮

⑱ しほみたぬまのの浜路のさゆりばも入りぬる磯は五月雨の比

(正治初度百首・一六三二)

正治二年百首

寂蓮法師

⑲ しほみたぬまののはまぢのさゆりばもいりぬるいそは浪のした  
草 (夫木和歌抄・三二二八)

⑳ 秋の野の千種の花をまつほどやしはしやどれるさゆりばの露

(老若五十首歌合・雅経・一六八)

㉑ さきにけりふかき夏の草むらのしげみにまじるさゆりばの花

(老若五十首歌合・越前・一七四)

㉒ さみだれに庭のさゆりば水こえていりぬるいその草かとぞ見る

(千五百番歌合・丹後・八〇三)

㉓ 夏ごろもすそ野のはらのゆふかせにあきおもほゆるさゆりばの  
つゆ (千五百番歌合・通具朝臣・九七七)

㉔ ゆふぐれのまがきにあまやかよふらんつゆをならはす庭のさゆ  
りば (千五百番歌合・保季朝臣・九八二)

㉕ 夏ふかき野ばらのくれにかけ見えてはたるつゆけきさゆりばの  
花 (千五百番歌合・雅経・一〇〇九)

㉖ 夏の野は草のしげみのさゆりばも秋はつゆにやしをれはつらん  
(千五百番歌合・釈阿・一一九三)

野島崎 近江国

家衡卿

㉗ 波かけて玉ぬく風や吹きつらん野島がさきのさゆりばの露  
(建保名所百首・五六八)

夏十五首

②7 庭もせに風におきふすさゆりばのなびくにおつる五月雨のころ

(忠信百首・二四)

②8 庭の面の草の茂みのさゆりばも花にしらるる夏はきにけり

(後鳥羽院定家知家人道撰歌／衣笠家良／八二)

恋

②9 さて又夏野に生ふるさゆりばのしられぬ露はすかたもなし

信実朝臣

(洞院撰政家百首・一〇五一)

夏草

③0 夏草にまじるさゆりばおのづから秋にしられぬ露やおくらん

道助

(宝治百首・一〇〇二)

夏草

③1 さゆりばのしられぬやどとなりやせんあとなきにはのくさのしきみに

(円明寺関白集・三三)

夏歌中に

③2 夏草の野島がさきのしほ風にすずしくさわぐ浪のさゆりば

(隣女集・一九四二)

夏十五首

藤原隆教

③3 しげりあふ野原の草にかくろへて夏にしられぬさゆりはのはな

(文保百首・二二二二)

夏草露

③4 夕立の名残の露に秋かけてなびくもすずし庭のさゆりば

(耕雲千首・二六六)

夏草

③5 茂るらし花咲く比のさゆりばにしられぬ山のおくのかげ草

(草根集・一三八三)

夏草

③6 小百合葉のしられぬし水くみたえて野中の草を結ぶ山風

(草根集・二三八六)

夏草

兼良

③7 まどふりてふみ見ぬ庭のさゆりばになほくさがくれ残る灯

(永享百首・二七三)

夏草

公保

③8 あまのかる玉もにまじる花なれや野島がさきに咲けるさゆりば

(永享百首・二七八)

百合

③9 夏の夜はむすぶともなしさゆりばのかごとがましくなびく朝露

(春夢草・一〇四二)

雨後夏草 慶長六月次

④0 雨すぐる草のしげみのさゆりばに咲出づる花の色ぞすずしき

(通勝集・一〇五七)

島夏草

④1 涼しさや浪こす風のふかぬ日も野島に靡く露のさゆり葉

(広沢輯藻・三三三)

島夏草

④2 夏草の中に花咲くさゆりばに野島が崎の露ぞはえある

(新明題和歌集・一一五三)

道寛

先にも述べたように、『万葉集』の次に見られる「ゆり」の用例は、①大江匡房のもので「さゆりば」という形になっている。『散木奇歌集』には「さゆりば」の例が②③の二例、その他に次のような「ひめゆり」の例が見える。

殿下にてこひの心をよめる

昨日まできびはにみえしひめゆりのいつたちなれてひとそめむらん  
(一一六八)

当該歌の「ひめゆり」は女性を譬えているものである。

さて、以上の挙げた和歌の中の「さゆりば」は、厳密に百合の葉という意味で使われているのか、それとも葉も花も含めた全体として「ゆり」とほとんど同じ意味で使われているのか、判断が難しい。  
①③は、葉先からしたたる露、撫子の花の背景としての百合の葉、風になびく百合の葉、といったように百合という植物の中でも葉に焦点を当てているとも受け取られるが、④の「さゆりば」は女を重ねているものと考えられるので、花も含めた百合であって、特に百合の葉のみを指すわけではないように思われる。⑥は「さゆりばの花」と表現しているので、この「さゆりば」は「ゆり」と同義と見てよく、特に葉に焦点を当てようとする意図はないであろう。⑥歌の後も「花」や「咲く」の語と共に詠まれる「さゆりば」の例は多い(⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)。⑩⑬の定家詠における「さゆりば」は「知られぬ」を導く枕詞のように用いられているが、これは次の『万葉集』の歌を下敷きにしていると思われる。

夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ

(巻八・一五〇〇・大伴坂上郎女)<sup>4</sup>

従って、⑩⑬歌の「さゆりば」は姫百合の花と置き換えられる、花をふくんだ百合の意味にとれそうである。この定家詠の後、「知られぬ」を共に詠み込む例も散見する(㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)。なお、㉗歌の「灯」は、

とこ夏

灯にまがふさゆりの色もあれど猶てりまさる床夏の花

(雅世集・四〇四)

#### 十九番 左

くれかかる野もせの草のしげみより入日を残す小百合花かな  
(沙玉集I・三四七)<sup>5</sup>

#### 夏草

廬むすぶ茂みがおくのさゆり花たがとす火の光なるらん

(草根集・二三三八)

などを参考にすると、紅い百合の花を詠んだものと思われる。これらの百合は人知れずひっそりと咲くという『万葉集』以来の捉えられ方とは対照的に、燃えるような華やかな色で、むしろ目立つ花として捉えられているよう。『草根集』には、

#### 夏草

茂りつつしられぬ草ぞおほからんさゆりは花の色にしるくて

(三三八七)

という詠歌もある。こうした紅い百合の花が詠まれるのは中世後期になってからのようである。なお、室町時代初期に成立したと思われる、異名和歌集『蔵玉集』では、姫百合の異名を「光草」とし、証歌として、

夏の野と心しづかに分行けば花におどろく光り草かな

を挙げる。出典を「万葉」とするが、当該歌は『万葉集』に見えず、問題が残る。<sup>6</sup>

また、「さゆり」「ゆり」「ひめゆり」などは、「庭」や「野辺」の語とともに詠まれることが多く、特定の地名とは結びつかないのに対し、「さゆりば」は「庭」や「野辺」の語とともに詠まれる例もあるが、③の俊頼歌の影響により「野島(が崎)」としばしば結びついている(⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)。



「ゆり」は「露」とともに詠まれることが多いが、「さゆりば」も同様である。中世になると、「蜚」が取り合わされることも散見するが(⑤⑧⑪②④)、「ひっそりと人目につかないところでそよぐ」「さ百合葉」と「蜚」の取り合わせは、中世和歌の創り出したきわめて印象的な新しい類型のひとつであった<sup>⑦</sup>という指摘もある。

以上、見てきたように、「さゆりば」は「ゆり」とは異なる詠み方をされる(地名「野島」との結びつき、「蜚」との取り合わせなど)一方で、「ゆり」とほとんど同じ意味に用いられている場合もあり、厳密な区別は難しい。当初は「葉」に重点があった言葉が、時代が下るにつれて、「ゆり」一般と区別されなくなったとも考えられるが、すでに殷富門院大輔が「さゆりばの花」という表現を用いているので、混乱が生じたのだとしても、それはかなり早い時期からということになる。『千五百番歌合』の②雅経詠について、判詞に「葉字何要百合花」とあって、判者藤原良経は「さゆりばの花」という表現に違和感をいだいていることが窺われるが、先にふれたように、この後も「花」や「咲く」の語と共に詠まれる「さゆりば」の用例は多い。

## 二、『源氏物語』賢木巻の「さゆりば」

第一節で見てきたように「さゆりば」の意味には不明瞭な点が残るが、この言葉が出てきた一つのきっかけは、次の『源氏物語』の一節とは考えられないだろうか。

心ばへもかどかどしう、容貌もをかしくて、御遊びのすこし乱れゆく程に、高砂を出だしてうたふいとつくし。大将の君、御衣ぬぎてかづけたまふ。……「あはましものをさゆりのは」

とうたふとぢめに、中将、御土器まゐりたまふ。

それもがとけさひらけたる初花におとらぬ君がにほひをぞ見

る  
ほは笑みて取りたまふ。

時ならでけさ咲く花は夏の雨にしをれにけらしにほふほどな  
く (賢木)

韻塞の負けわざで頭中将の次男が催馬楽「高砂」を歌い、続いて源氏と中将がその「高砂」の詞章を踏まえた和歌の贈答を行う場面である。「高砂」の詞章は次の通り。

高砂の さいささごの 高砂の

尾上に立てる 白玉玉椿 玉柳

それもがと さむ 汝もがと 汝もがと

練緒染緒の 御衣架にせむ 玉柳

何しかも さ 何しかも 何しかも

心もまたいけむ 百合花の さ 百合花の

今朝咲いたる 初花に 逢はましものを さ 百合花の<sup>⑩</sup>

詞章の最後は「逢はましものをさ百合花の」というものだが、『源氏物語』の本文は「さゆりのは」としている。これが単なる書き誤りなのか、催馬楽の歌唱上、このように発音されたのかははっきりしない。源氏物語の本文を『源氏物語研究大成』の校異で確認した限りでは、陽明家本と伝冷泉為相筆本が「さゆりのはな」としている以外はみな「さゆりのは」となっている。一方、催馬楽「高砂」の方は催馬楽古譜・略譜には曲自体が載っておらず、確認できた天治本、鍋島家本ともに「さゆりはな」になっている。『源氏物語』の注釈書類で、当該箇所を典拠に催馬楽「高砂」を指摘するものは多く、曲名のみを挙げる場合と詞章を挙げる場合があり、詞章を挙げ

る場合、管見では『孟津抄』以外は、すべて「さゆりはなの」と引用する。典拠の「さゆりはなの」と『源氏物語』本文「さゆりはの」の違いに注意を払っているものはほとんどなく、管見の範囲の古注では、『岷江入楚』と『湖月抄』が次のように述べている程度である<sup>(11)</sup>。

さゆりはのとかきたるはうたふしによりてかやうにきこゆる歟 或抄云御説ニ高砂の哥の末の詞はさゆりはなとあるをさゆりはのとかきたるは花の字をまたいひもはてぬにはの字の時御さかつきをまいらせらるゝ也

〔『岷江入楚』<sup>(12)</sup>〕

さゆりばのと云へる、うたふによりてさやうにあるるべし

〔『源氏物語湖月抄』<sup>(13)</sup>〕

『岷江入楚』の前者の説が『湖月抄』にも引かれ、これを受けて、現代の注釈書では、次のような指摘が見える程度である。

陽明家本と伝冷泉為相筆本は歌詞のとおり「さゆりはなの」となっていて問題はないが、だからといって必ずしもその方が正しいとは言えない。高砂の文句を知っている書写者が、書き改めたのかも知れないからである。あるいは実際に謡うばあい、「さゆりはの」とうたうたい方があったのかも知れないからである。

(玉上琢彌『源氏物語評釈』第二巻 角川書店 一九六五年)  
「高砂」の末句。歌詞は「さゆり花の」であるが、歌う際なので「さゆりばの」となったかという(『湖月抄』師説)。

(石田穰二・清水好子校注 新潮日本古典集成『源氏物語二』新潮社 一九七七年)

高砂の末の句。「さ 百合花の」が歌唱上「さゆりはの」と発音されたか。

(柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注 新日本古典文学大系『源氏物語一』 岩波書店 一九九三年)

これらの指摘の如く、実際に歌う際に「さゆりはの」と発音された可能性を全く否定することはできないが、先に述べたように、催馬楽「高砂」の詞章は天治本、鍋島家本ともに「さゆりはな」になっており、異説としても「さゆりは」には触れられていないので、催馬楽で「さゆりはの」と歌われることが相当の頻度で行われて、それを耳から聞いた人々が「さゆりは」という言葉を意識したというよりは『源氏物語』の本文に影響を受けたと考えられるのではないだろうか。『源氏物語』の本文によって歌人たちは「さゆりは」という言葉を意識し、和歌に詠み込むようになったとは考えられないだろう<sup>(14)</sup>。これは当然ながら一つの推測にすぎないが、問題提起として述べた次第である。

### 三、『源氏物語』を媒介にした催馬楽享受

これまでもすでに指摘があり<sup>(15)</sup>、稿者も考えたことがあるが、和歌に催馬楽が取り込まれる上で、『源氏物語』の果たした役割は大きい。前稿にもふれたが、たとえば催馬楽「飛鳥井」が、もともと恋の要素を持たない曲であったのに、『源氏物語』で恋の場面で引用されたことにより、「飛鳥井」という言葉が恋歌で詠まれることになったらしいし、藤原定家の場合は、『源氏物語』に取り込まれた催馬楽を自分の和歌に取り入れる態度が見られ、『源氏物語』が、和歌の典拠としての催馬楽の正当性を保証するような形になっていた<sup>(16)</sup>のであった。『源氏物語』を媒介にした和歌における催馬楽受容

の例として、さらにつけ加えれば、たとえば次の『草根集』「松下集」の例は明らかに催馬楽と『源氏物語』本文をあわせて引いている。

顕恋

さまかふるその石川のこまう人にひかれて出でし弓張の月

(草根集・六七三六)

互忍恋

石川や扇とかはることのはもおぼろけならで誰かしらまし

(松下集・一一四四)

『源氏物語』花宴巻で、光源氏は南殿の桜の宴の夜、忍び入った弘徽殿の細殿で、一人の女(臘月夜)と出会う。夜明けの気配に、女の名前も聞けぬまま、扇をしるしに取り替えて、二人はあわただしく別れる。一ヶ月の後、源氏は右大臣の催す藤の花の宴に招かれる。酔いに紛れて、先夜の扇の主を探す。花宴巻の最終部分は次の通りである。

さしもあるまじきことなれど、さすがにをかしう思はされて、いづれならむ、と胸うちつぶれて、「扇を取られてからきめを見る」と、うちおほどけたる声に言ひなして、寄りゐたまへり。「あやしくもさま変へける高麗人かな」といらふるは、心知らぬにやあらん。答へはせで、ただ時々うち嘆くけはひする方に寄りかかりて、几帳ごしに手をとらへて、

あづさ弓いるさの山にまどふかなほのみし月の影や見ゆると

何ゆゑか」とおしあてにのたまふを、え忍ばぬなるべし、心いる方ならませばゆみはりのつきなき空に迷はまじやは

といふ声、ただそれなり。いとうれしきものから。

「扇を取られて、からき目を見る」「あやしくもさまかへける高麗人かな」は、次の催馬楽「石川」を踏まえたもので、「帯」を「扇」にかえて、逢瀬の秘密を知る女を探したのである。

石川の 高麗人に 帯を取られて からき悔する

いかなる いかなる帯ぞ 縹の帯の 中はたいれなるか  
かやるか あやるか 中はたいれたるか

典拠の「石川」では「帯」のはずなのに「扇」とは「おかしな高麗人です」と反応するのは事情を知らぬ女であり、時折ため息をつく女こそ探している女だと思い定めて、源氏は歌を詠みかける。返歌をする声はまさしくその女であった。

『草根集』『松下集』の「さまかふる」「扇とかはる」は、『源氏物語』における扇の交換を踏まえているものであり、この場面の典拠にあたる「石川」の曲名を詠み込んでいる。『草根集』の例はさらに、『源氏物語』の臘月夜の和歌に含まれる「弓張りの月」を取り込んでいいる。これらの和歌を解釈するためには、催馬楽の詞章に戻る必要は必ずしもなく、『源氏物語』本文によって作ったと見てもよいほどであるが、いづれにせよ、『源氏物語』に取り入れられたことによって催馬楽「石川」はより広く知られるようになった、あるいは歌人たちに強く意識されるようになったということではできないのではないだろうか。

このような、『源氏物語』を通した催馬楽と和歌との密接な関係を考えて、「さゆりば」の語が典拠の「高砂」を離れて、和歌の中に浸透していくことも、可能性としてはあり得ることのように思われるのである。

#### 四、紫式部の和歌と催馬楽

紫式部は『源氏物語』の中に多くの催馬楽を引用しているが、『紫式部集』、および『紫式部日記』に見える本人の和歌を確認すると、催馬楽を引いていると思われる例は次の一例のみであった。

播磨の守、暮の負態しける日、あからさまにまかでて、のちにぞ御盤のさまなど見たまへしかば、華足などゆゑゆゑしくして、洲浜のほとりの水にかきまぜたり。

紀の国のしららの浜にひろふてふこの石こそはいはほともなれ<sup>⑩</sup>

催馬楽「紀伊国」に歌われた「しららの浜」を詠んでいる。当該歌の本歌として、「天禄四年円融院資子内親王乱碁歌合」の、

心あてに白良の浜に拾ふ石の巖とならむ世をしこそ待て<sup>⑪</sup>

が指摘されているが、これ以外の「しららの浜」の和歌の用例のうち、紫式部詠に先行するのは次の二首程度で、紫式部詠は「しららの浜」を使った早い方の用例と言い得る。

しららの浜

君が代のかずともとらん紀の国のしららのはまにつめるいさごを  
(兼盛集・五七)

しららのはま、松原に人人逍遙したり

なみたてる松はみどりのいろなるをいかでしららのはまといふらん  
(能宣集・三三二)

催馬楽「紀伊国」の詞章は次の通り。

紀伊国の 白らの浜に ま白らの浜に 下りゐる鴈 はれ その珠持て来

風しも吹けば 余波しも立てれば 水底霧りて はれ その珠見えす

「資子内親王乱碁歌合」の例や、兼盛詠、紫式部詠は浜の石が岩になるまでの時の長さ、あるいは砂の数の多さを詠んだ賀の歌であり、その浜が「しららの浜」である必然性はさほど強くない。能宣詠は「しららの浜」の「白」と松の緑とを対比した言葉遊びの歌になっている。この後の「しららの浜」の用例は催馬楽「紀伊国」に見える玉だけでなく、雪や月と共に詠まれて白さを強調するものが多くなり、たとえば次のような例が見出される。

月

びちう

かもめゐるしららのはまのみなそこにそのたまみゆるあきのよの月  
(四条宮扇歌合・三)

旅

仲実

いくよねぬしら玉よするましららの浜松がねの木の葉折りしき

(堀河百首・一四六三)

海辺雪

為忠

いはにゐるうらもさきになりにけりしららのはまのゆきのあし  
たは  
(為忠家後度百首・四七九)

海辺雪

為経

きのくにやしららのはまにふるゆきのきゆともゆきのとどめお  
かなん  
(為忠家後度百首・四八五)

兵庫頭、歌合せむとてこひしかば 雪

かもめゐるうみべにゆきのふりぬればかもしららのはまそこ  
そ見え  
(重家集・二九二)

しららのはま

ふなちより月かゆきかとみえつるやしららのはまままさなる  
(三)

らむ

(風情集・七二)

白良浜

くまもなきしらはのはまの月みてぞさやけかけのほどはしり  
ぬる

(成仲集・一〇〇)

月十首

はなれたるしらはのはまのおきのいしをくだかであらふ月の白  
波

(山家集・一四七六)

題不知

月影のしらはのはまのしろかひはなみもひとつに見えわたるか  
な

(西行法師家集・六六一)

月 十三番 左

重政

くものなみよはのひがたにきえぬれば月にしらはのはまさびに  
けり

(文治二年歌合・五九)

「四条宮扇歌合」の例は、「かもめるる」「みなそこ」「そのたま」  
など、催馬楽「紀伊国」と重なる言葉が多く、催馬楽では、霧で水  
底の玉が見えないと歌っているものを、月の光によって水底の玉が  
よく見えるというように、状況を反転させて詠んでいる。催馬楽に  
寄り添った詠歌と言い得るが、その後は、月の光や雪によって、  
「しららの浜」全体が白く輝くような、美しく幻想的な風景を詠む  
ようになる。典拠の催馬楽から離れて、和歌が独自の表現を獲得し  
ていく一例と言えよう。

以上、歌語「さゆりば」の使われ方について「ゆり」と比較しつ  
つ検討を加え、この歌語の成立に、『源氏物語』における催馬楽  
「高砂」引用が影響を与えている可能性を論じた。また、紫式部は  
物語には多くの催馬楽を引用し、作中人物には催馬楽を踏まえた和

歌を詠ませているものの、自身の和歌においてはあまり催馬楽を引  
いていないことを確認した。一曲の中に複雑な物語を内包すること  
も多い催馬楽は、物語の中に組み込んでこそ面白みが発揮できると  
考えたのであろうか。そして、『源氏物語』の中に引用された催馬  
楽は、後代の和歌において、頻繁に引かれるようになり、時には  
『源氏物語』本文と合わせた享受が見られるようになるのであった。

# 注

- 1 『角川古語大辞典』は、百合の葉の意の他に「小百合に同じ」  
として、『源氏物語』に引用された催馬楽「高砂」の詞章  
(本文第二節に引用)と、本文第一節に引いた⑥の和歌を挙  
げている。
- 2 平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』(東京堂出版 一九  
九四年)。
- 3 新編国歌大観により、一部表記を改めた。『万葉集』以外の  
和歌の引用は、以下同じ。
- 4 新編日本古典文学全集『万葉集②』(小学館 一九九五年)  
による。
- 5 『沙玉集』の当該箇所は、後崇光院の自歌合にあたる部分で  
ある。判詞を父・大通院に依頼しているが、その判詞には、  
「小百合花入日を残すらんこと、さる証歌もや侍らめども、  
ことごとしきさまにきこえ侍り」とあって、あまり評価され  
ていない。
- 6 『万葉集』には、  
油火の光に見ゆるわが縋さ百合の花の笑まはしきかも

(巻十八・四〇八七・大伴家持)  
灯火の光に見ゆるさ百合花ゆりも逢はむと思ひそめてき

(巻十八・四〇八八・内蔵繩麻呂)

とあって(引用は新編日本古典文学全集『萬葉集④』〈小学館 一九九六年〉による)、百合の花の色とは関係がないものの、百合と灯火が共に詠まれている。天平感宝元年五月九日に秦石竹の館で催された宴会において、主人の石竹が百合の花纏を作って客たち(越中国庁の役人ら)に贈呈したので、この纏に寄せて歌が詠まれることになったのであった。これらの詠歌が、中世になって赤い百合の花を詠むきっかけになった可能性も考えられるのではないか。『雲玉集』はこの二首を引いて、「あぶらにゆとよせて、ゆりをよめるなるべし」と解説している。詠歌状況から離れた誤解と言えようが、こうした考え方が、百合の花そのものと油火、灯火を結び付けていったとも解されよう。『雲玉集』は、万葉歌「筑波嶺のさ百合の花の夜床(ゆとこ)にもかなしけ妹を昼もかなしけ」(巻二十・四三六九)についても、「さゆりは、あぶら火にたとへて、ゆとよめり、よどこなり」と注する(四〇五)。ここでははっきりと、百合はあぶら火に譬える、とするが、こうした認識は、やはり紅い花色を媒介として生じているものと思われる。

7  
注2書による。

8  
「さゆりば」と似たような状況を示す歌語として「はちすば」がある。「はちすば」は、ほとんどの場合、蓮の葉を指すことが明白で、大きな葉の上の露を詠むことが多いが、次の如く、「花」「咲く」などの語と共に詠まれて、「はちす」とは

とんど同義で用いられることもある。

蓮をよめる

清円法師

はちす葉の花におきる露のみはつとめてやどるもとこそきけ

蓮華初開楽

(月詣和歌集・五一五)

はつはなとさくもほどなきはちす葉のにごりにしまぬいろやみゆらん

(明日香井和歌集・四七二)

蓮

顯仲

はちす葉は妙なる法の花なればまことの池の心にぞさく

(堀河百首・五〇六)

蓮

はちす葉も花さくほどに成りにけりをしか妻ごひ秋ちかからし

(為兼鹿百首・三二)

ただし「はちす」と同じ意味ととれる例は「さゆりば」が「さゆり」と同義であるらしい例よりも少なく、ごくわずかである。また、仏教的な意味を持たされ、実際の植物そのものではなく、宗教世界の象徴となっていることも多く、「さゆりば」と全く同列には扱えない点もある。

9  
新編日本古典文学全集『源氏物語②』(小学館 一九九五年)による。

10  
新編日本古典文学全集『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』(小学館 二〇〇〇年)による。催馬楽の引用は、以下、同書による。

11  
管見の範囲の『源氏物語』注釈書で、当該箇所と典拠について、扱い方は次の(1)~(4)の四通りである(典拠に全くふれていないものは省略した)。

(1) 曲名「高砂」のみ指摘するものは、以下の通り。ただし、『奥入』と『休閒抄』は、「高砂」の冒頭のみ詞章をあげてい  
る。( ) 内は確認したテキスト。

- ・宮内庁図書寮本源氏釈(源氏物語古注大成第八巻 日本図書センター 一九七八年)
- ・奥入(第一次・大島本)(源氏物語大成第七巻 中央公論社 一九五六年)
- ・紫塵愚抄(源氏物語古注釈叢刊第五巻 武蔵野書院 一九八二年)
- ・一葉抄(源氏物語古注集成第九巻 桜楓社 一九八四年)
- ・弄花抄(源氏物語古注集成第八巻 桜楓社 一九八三年)
- ・内閣文庫本細流抄(源氏物語古注集成第七巻 桜楓社 一九八〇年)
- ・明星抄(源氏物語古注釈叢刊第四巻 武蔵野書院 一九八〇年)
- ・萬水一露(源氏物語古注集成第二十四巻 桜楓社 一九八八年)
- ・休閒抄(源氏物語古注集成第二十二巻 桜楓社 一九九五年)
- (2) 曲名・歌詞の指摘があり、本文と典拠の差異には言及しないものは、以下の通り。
- ・前田家蔵本源氏釈(源氏物語大成第七巻 中央公論社 一九五六年)
- ・奥入(第二次・定家自筆本)(源氏物語大成第七巻 中央公論社 一九五六年)
- ・紫明抄(『紫明抄・河海抄』角川書店 一九六八年)

・異本紫明抄(未刊国文古注釈大系第十巻 清文堂出版 一九三八年)

・河海抄(『紫明抄・河海抄』角川書店 一九六八年)

・源氏一滴集(源氏物語古注大成第八巻 日本図書センター 一九七八年)

・光源氏一部歌(源氏物語古注集成第三巻 桜楓社 一九七九年)

・松永本花鳥余情(源氏物語古注集成第一巻 桜楓社 一九七八年)

・孟津抄(源氏物語古注集成第四巻 桜楓社 一九八〇年)

★歌詞を「さゆりはの」として引用。

・花屋抄(源氏物語古注大成第八巻 日本図書センター 一九七八年)

・池田亀鑑 日本古典全書『源氏物語二』朝日新聞社 一九四九年

・山岸徳平 日本古典文学大系『源氏物語一』岩波書店 一九五八年

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『日本の古典源氏物語二』小学館 一九八三年

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 新編日本古典文学全集『源氏物語②』小学館 一九九五年

(3) 曲名・歌詞の指摘があり、本文と典拠の差異に言及するものの、理由考察は加えないものは、以下の通り。

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛 日本古典文学全集『源氏物語一』小学館 一九七二年

(4) 曲名・歌詞の指摘があり、本文と典拠の差異に言及して、

理由を考察するものは、以下の通り（記述内容は本文に引用）。

・ 岷江入楚（源氏物語古注集成第十一巻 桜楓社 一九八〇年）

・ 源氏物語湖月抄（源氏物語古注集成第九巻 日本図書センター 一九七八年）

・ 石田穰二・清水好子 新潮日本古典集成『源氏物語二』新潮社 一九七七年

・ 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎 新日本古典文学大系『源氏物語一』小学館 一九九三年

12 『源氏物語古注集成』第十一巻（桜楓社 一九八〇年）による。

13 『源氏物語古注集成』第九巻（日本図書センター 一九七八年）による。

14 なお、「ゆり」を詠んだ和歌の中で、明らかに催馬楽「高砂」を下敷きになっていると考えられるものはあまり見当たらず、管見では、『柏玉集』に

夏雨

しほるなよ今朝ぞさゆりの初花にあまり露けき夏の雨かな

（五〇六）

とあって、「初花」が共に詠み込まれている程度。和歌の中で「初花」が詠まれる植物は、梅と桜が圧倒的に多く、萩、藤、菊、撫子、女郎花、薄、桃などが続き、蓮、山吹、朝顔、紫陽花の例もわずかながら見える。百合の「初花」が詠まれるのは、管見では先の『柏玉集』のみであった。

15 田中初恵「催馬楽と和歌——定家に至るまでの様相——」

『古典論叢』第二十号 一九八八年九月、青木真知子「寄催馬楽恋」考（『濱口博章教授退職記念国文学論集』和泉書院 一九九〇年）など。

16 拙稿「催馬楽と和歌」（『古代中世文学論考』第十二集 新典社 二〇〇四年五月）。

17 新編日本古典文学全集『源氏物語①』（小学館 一九九四年）による。

18 浅野建二「源氏物語と催馬楽」（『国語と国文学』第二十九巻 第九号 一九五二年九月）、植田恭代「源氏物語における催馬楽引用——「東屋」巻の場合——」（『中古文学』第四十三号 一九八九年五月）、「歌謡をどのように取り込んでいるのか」（『源氏物語講座 第六巻』勉誠社 一九九二年）、「源氏物語」と催馬楽「道の口」——浮舟と遊女——」（『跡見学園女子大学紀要』第三十五号 二〇〇二年三月）など、多くの論考がある。

19 新編日本古典文学全集『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（小学館 一九九四年）による。

20 萩谷朴『平安朝歌合大成 増補新訂』第一巻（同朋舎出版 一九九五年）による。

21 新日本古典文学大系『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』（岩波書店 一九八九年）脚注。

22 小野恭靖「催馬楽出自の歌ことば——歌枕・地名を中心として——」（小町谷照彦・三角洋一編『歌ことばの歴史』笠間書院 一九九八年）に指摘がある。

23 拙稿「催馬楽と和歌——和歌における催馬楽の享受・展開・受容——」（『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第三



十五集 二〇〇四年十二月にも、同様の例を挙げて論じた。

\* A Study of the Word “Sayuriba” in Waka  
\* Tomoko Ueki (Japanese Language and Literature)  
キーワード 和歌 催馬楽 源氏物語